

《添削版》銀河鉄道の夜

一、午後の授業

先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問いをかけました。

「では、みなさんは、そういうふうには、川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニは手をあげようとして、やめました。あれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろ毎日、教室でもねむく、本を読むひまもないので、どんなこともよくわからないという気持ちがあるのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか。」

ジョバンニは勢いよく立ちあがりましたが、立って見ると、もう答えることができませぬ。ザネリが前の席からふりかえって、くすつとわらいました。ジョバンニはどきまぎしてまっ赤になってしまいました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんども答えることができませぬ。

先生は困ったようすで眼をカムパネルラの方へ向けました。

「では、カムパネルラさん。」

すると、あんなに元気に手をあげたカムパネルラが、もじもじ立ち上ったまま答えができませぬでした。

先生は意外なようにしばらくカムパネルラを見ていましたが、「では、よし」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を、大きないい望遠鏡で見ますと、たくさん小さな星に見えるのです。

ジョバンニさん、そうでしょう。」

ジョバンニはまっ赤になつてうなずきました。眼には涙がいっぱいでした。

（そうだ僕は知っていたのだ、もちろん、カムパネルラも知っている。いつかカムパネルラのうちでいっしょに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。）

カムパネルラが、お父さんの書齋から巨きな本をもってきて、「ぎんが」というところをひろげ、まっ黒なペーजीいっばいに白い点々のある美しい写真を見たのでした。

（カムパネルラが忘れるはずもないのに、返事をしないのは、ぼくがこのごろ仕事がつらくて、学校に出てもみんなと遊ばないのを気の毒がったからだ。）

先生はまた云いました。

「ですから、この天の川を川だと考えるなら、一つ一つの小さな星はみんな川の底の砂や砂利の粒にあたるわけです。また、これを、巨きな乳の流れと考えるなら、星はみな、乳のなかに細かに浮かんでいる油脂の球にあたるのです。そんなら、何がその川の水にあたるかと云いますと、それは光をある速さで伝える真空というもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでいます。わたしどもも、天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そして、そのなから四方を見ると、ちようど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見え、したがって、白く

ぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい。」

先生は、光る砂のつぶのたくさん入った大きな両面凸レンズを指しました。「天の川の形は、ちょうどこんなです。いちいちの光るつぶがみんな、じぶんで光っている星だと考えます。太陽がほぼ中ごろにあつて、地球がすぐ近くにあるとします。みなさんが夜、このまん中に立ってレンズの中を見まわすとしてごらん下さい。こっちの方はレンズが薄いので、わずかの光る粒すなわち星しか見えないのです。こつちやこつちの方は厚いので、星がたくさん見え、遠い星は、ぼうつと白く見えるという、これがつまり今日の銀河の説なのです。そんなら、このレンズの大きさがどれ位あるか、またさまざまの星については、もう時間ですから、この次の理科の時間にお話します。今日は、その銀河のお祭なのですから、みなさんは外へ出てよく空をごらん下さい。では、ここまでです。本やノートをおしまい下さい。」

そして、教室中はしばらく机の蓋をあけたりしめたり、本を重ねたりする音がいっぱいでしたが、まもなくみんなは、きちんと立って礼をすると教室を出ました。

二、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人がカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木の下に集まっていました。こんやの星祭に青いあかりをつけて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは、手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。町の家々では、いちいの葉の玉をつるしたり、ひのきの枝にあかりをつけたり、銀河の祭の仕度をしていました。

ジョバンニは、町の大きな活版所にはいつてゆきました。小さな平たい函をとりだして、たくさん電燈のついた植字台の前へしゃがみ込むと、小さなピンセットで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。

六時がうってしばらくたったころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱を、手にもった紙きれと引き合せました。

それから、受付で小さな銀貨を一つ受け取ると、俄かに顔いろがよくなって、威勢よくおじぎをする、おもてへ飛びだしました。

それから口笛を吹きながらパン屋へ寄って、パンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

三、家

ジョバンニが勢よく帰って来たのは、裏町の小さな家でした。入口の空き箱には紫いろのケールやアスパラガスが植えてあり、二つの小さな窓には日覆いが下りたままでした。

ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの。」

「今日は涼しくてね。ずうっと工合がいいよ。ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。」

お母さんはすぐ入口の室に白い巾を被って寝んでいます。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って。姉さんはいつ帰ったの。」

「三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだらうか。」

「来なかったらうかねえ。」

「ぼく、とつて来よう。」

「あたしはゆつくりでいいんだから。姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行ったよ。お前さきにおあがり。」

「では、食べよう。」

ジョバンニは窓のところからトマトの皿をとつて、パンといっしょにむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼく、お父さんはきつと、間もなく帰ってくると思うよ。」

「あたしもそう思う。おまえは、どうしてそう思うの。」

「今朝の新聞に、今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあったよ。」

「だけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るような悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのトナカイの角だの、今だつてみんな標本室にあるんだ。」

「この次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながぼくにそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

「悪口を云うの。」

「うん、けれども、カムパネルラは決して云わない。みんなが云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人のお父さんとうちのお父さんとは、おまえたちのように小さいときからお友達だったそうだよ。」

「お父さんは、ぼくをカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。学校から帰る途中、たびたびカムパネルラのうちに寄った。アルコールランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合せると円くなって、電柱や信号標もついている。アルコールがなくなって石油をつかったら、罐がすっかり煤けたよ。」

「そうかい。」

「いまも毎朝、新聞を配りに行くけれど、いつでも家中しいんとしている。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるんだ。しつぽが箒のようで、ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくる。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだつて。きつと犬もついて行くよ。」

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

ジョバンニ「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくる。」

「行つておいで。川へは、はいらないでね。」

「うん、岸から見ただけだよ。一時間で行つてくる。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒なら心配ないから。」

「きつと一緒だよ。窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう、涼しいからね。」

「では一時間半で帰ってくるよ。」

ジョバンニは立つて窓をしめ、お皿やパンの袋を片附けると、靴をはいて勢いよく暗い戸口を出ました。

四、ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、檜のまつ黒にならんだ町の坂を下りて来ました。坂の下には、一本の大きな街燈が青白く光つて、立っていました。

ジョバンニが街燈の下に来たとき、ザネリが、えりの尖った新しいシャツを着て暗い小路から出て

来ました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」

「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」

「ジョバンニは、ぼつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るようでした。」

「何だい。ザネリ！」

「ジョバンニは高く叫び返しましたが、ザネリはもう家の中へはいってしまいました。」

（ザネリは、どうしてあんなことを云うんだ。ぼくがなんにもしないのに。ザネリはばかだ。）

「ジョバンニは、さまざまの灯や木の枝できれいに飾られた街を通って行きました。」

時計屋の店には明るくネオン燈がついていました。海のような色の厚い硝子盤に載ったいろいろな寶石が星のようにゆっくり循環しています。まん中には円く黒い星座早見が、アスパラガスの緑の葉で飾ってありました。

「ジョバンニはわれを忘れて、星座の図に見入りました。」

日にちと時刻に合わせて盤をまわすと、空が楕円形のかたちにあられるようになっていました。まん中には、ぼうとけむった銀河が上から下へ帯になって湯気でもあげているように見えました。

店の奥には三本脚の望遠鏡が黄いろく光って立ち、壁には、獣や蛇や魚や瓶の形を書いた大きな星図がかかっていました。

（ほんとうに、こんな蝸だの勇士だのが、空に居るのだろうか。そんなところを、どこまでも歩いて見たい）

「ジョバンニは俄かにお母さんの牛乳のことを思いだして、その店をはなれました。」

澄みきった空気が水のように通りや店の中を流れています。街燈はみな、もみや檜の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木には、たくさんの豆電燈がついて、人魚の都のようでした。

子どもらはみんな、新らしい着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、「ケンタウルス、露をふらせ」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして遊んでいました。

「ジョバンニはいつか、ポプラの木が幾本も高く星ぞらに浮んでいる町はずれにきていました。牛乳屋の黒い門を入り、台所の前に立って帽子をぬぎました。」

「今晚は、ごめんなさい。」

「しばらくたつてから、年老った女の人が、工合悪そうにそろそろ出て来て「何か用ですか」と云いました。」

「今日、牛乳が僕んとこへ来なかったので、貰いにあがったんです。」

「いま誰もいないので、わかりません。あしたにして下さい。」

「おつかさんが病気なんです。今晚でないと困るんです。」

「ではもう少したつてから来て下さい。」

「そうですか。では、ありがとうございます。」

「ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。」

「ジョバンニが十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、六七人の生徒らが、めいめい烏瓜の燈火を持って、口笛を吹いたり笑ったりして、やって来ました。」

笑い声も口笛も聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニはどきつとして戻ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」とジョバンニが云おうとしたとき、ザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」

「ジョバンニはまっ赤になって、急いで行きすぎようと思いました。すると、そのなかにカムパネルラ

が居たのです。

カムパネルラは気の毒そうにだまつて、怒らないだろうかというようにジョバンニを見ました。ジョバンニは、その眼を避けました。なんとも云えずさびしくなつて、いきなり走り出しました。

五、天気輪の柱

まつくらなやぶのしげみの間を、小さなみちが一すじ、白く星あかりに照らしだされていました。ジョバンニは、どんだんのぼつて行きました。

まつ黒な松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、南から北へ天の川が横たわつていました。

ジョバンニは、頂上の天気輪の柱の下に来て、どこかするからだを、つめたい草に投げました。風が遠くで鳴り、丘の草はしずかにそよいでいます。ジョバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。

ジョバンニは町はずれから遠くへ黒く広がる野原を見わたしました。

そこから、汽車の音が聞えてきました。たくさんの旅人が、その中で苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風に行っていると考えますと、ジョバンニは何とも云えずかなしくなつて、また眼をそらにあげました。

(ああ、あの白いそらの帯がみんな星だということか。)

その空は、先生の云うような、がらんとした冷たいとこだとは思われません。見れば見るほど、林や牧場のある野原のような気がしました。

六、銀河ステーション

ジョバンニは、天気輪の柱が三角標の形になつて、蛍のように、ペカペカ消えたりともったりするのを見ました。それがだんだんはつきりして、青い鋼の板のような空の野原に、まっすぐに立ちました。

どこかで「銀河ステーション、銀河ステーション」と云うふしぎな声がしたと思うと、いきなり眼の前が、ぱつと明るくなりました。ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦りました。

気がつくと、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのでした。

ジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄色い電燈のなんだ車室に座っていたのです。青い天蚕絨を張った腰掛けはがら明きで、鼠いろのワニスを塗った壁には、真鍮の大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまつ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ていました。肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がします。

すると、俄かにその子が頭を引つ込めて、こつちを見ました。それはカムパネルラだったので。「みんなはね、ずいぶん走ったけれども、遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかつた。」

(そうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそつて出掛けたのだ) と思いながらジョバンニは云いました。

「どこかで待っていらっしゃいますか？」

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ。」

カムパネルラは顔いろが青ざめて、どこか苦しそうでした。ジョバンニも、何か忘れたものがある

ような気がしました。

ところがカムパネルラは、もうすっかり元気が直って、勢よく云いました。

「しまった。水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。」

カムパネルラは、円い板のような地図をぐるぐるまわして見えています。天の川の岸に沿って一条の鉄道線路が書かれています。

地図のまつ黒い盤に、停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑の美しい光でちりばめられています。ジョバンニはどこかでその地図を見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。」

「銀河ステーションで、もらったんだ。君、もらわなかったの。」

「ぼく、銀河ステーションを通ったろうか。いまぼくたちの居るところ、ここだろう。」

ジョバンニは、「白鳥」と書いてある停車場のすぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」

ジョバンニがそつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろのすすきがいちめん、風にさらさらゆられて波を立てています。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」

ジョバンニははね上りたいくらい愉快になって、窓から顔を出しました。

その水は、ガラスよりも水素よりもすきとおって、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらっと光ったりしながら、音もなく流れて行きます。野原のあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っています。

遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少

しかすんでいます。あるいは三角形、あるいは四辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにあらんで、野原いっぱい光っているのです。

ジョバンニはどきどきして、頭をやけに振りまわした。すると、野原中の青や橙にかがやく三角標が、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顫えたりしました。

「この汽車、石炭をたいていないねえ。」

「アルコールか電気だろう。あつ、りんどうの花が咲いている。」

線路のへりのみじかい芝草の中に、月長石で刻まれたような紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまった。」

次から次から湧くように、黄色い底のりんどうの花コップが、眼の前を通っていきました。

カムパネルラがいきなり、思い切ったように急きこんで云いました。

「おつかさんは、ぼくをゆるして下さいさるうか。」

（ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの橙いろの三角標のあたりにいらっしやって、いまぼくのことを考えているんだ。）

「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、いちばんの幸なんだろう。」

カムパネルラは泣きだしたいのを一生けん命こらえているようでした。ジョバンニはびっくりして叫びました。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」

「ぼくわからない。けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さいさると思う。」

語り カムパネルラは、なにか決心したように見えました。

七、北十字とプリオシン海岸

俄かに、車内が、ぱつと明るくなりました。きらびやかな銀河の河床の上を、水は声もかたちもなく流れ、まん中に青白く後光の射した島が見えました。

島のいただきには、立派な白い十字架が、金いろの円光をいただいて立っていました。

すると、「ハルレヤ、ハルレヤ」という声が、前からもうしろからも起こりました。車室の旅人たちは、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の珠数をかけたり、指を組み合せたりして祈っているのです。

二人も立ちあがりました。カムパネルラの頬は、熟した苹果のようにつくつくかがやきました。

ジョバンニのうしろには、黒いかつぎをした背の高いカトリック風の尼さんが、まん円な緑の瞳をじつと落して、虔んで何かを聞いているように見えました。

島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かつきりに着くんだよ。」

汽車はだんだんゆるやかになって、白鳥停車場の大きな時計の前でとまりました。

盤面の二本の針は十一時を指し、時計の下に「二十分停車」と書いてありました。

みんなは一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなってしまいました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」

「降りよう。」

二人はかけて行きました。改札口には、紫の電燈が一つ点いているばかり、駅長や赤帽の人影もありません。

二人は、停車場の前の、水晶細工のような銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青い光の中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、どこへ行ったか、ひとりも見えません。二人が肩をならべて白い道を行きますと、汽車から見えたきれいな河原に来ました。

カムパネルラは、きれいな砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせました。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」

どこでぼくは、そんなこと習ったろうと思いつながら、ジョバンニは答えました。

河原の礫は、みんなすきとおって、水晶や黄玉や鋼玉やらでした。

ジョバンニは渚へ走って行き、手を水にひたしました。銀河の水は、水素よりもとすきとおっていました。

水にひたった手首が、水銀いろに浮いたように見え、手首にぶつつかった波は、燐光をあげて、ちらちら燃えるようでした。

川上には、すすきのいっぱい生えた崖の下に、川に沿って白い岩が運動場のようになっていました。

五、六人の人がかが、何か掘り出しているらしく、手にした道具が時どきピカッと光りました。

「行ってみよう。」

二人は走りだしました。白い岩の入口に「プリオシン海岸」と、つるつるした瀬戸物の標札が立つて、渚には細い鉄の欄干が植えられ、木製のベンチも置いてありました。

カムパネルラが岩の中から黒くて細長いくるみの実のようなものを拾いました。

「くるみの実だよ。たくさんある。流れて来たんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」

「大きいね、このくるみ。倍あるね。すこしもいたんでない。」

「あそこへ行つて見よう。何か掘ってるから。」

二人は近よつて行きました。

ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた背の高い学者らしい人が、手帳に何か書きつけながら、三人の助手にせわしく指図をしていました。

「その、その突起を壊さないように。スコップを使いたまえ、スコップを。おっと、もう少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

大きな青白い獣の骨が、横に倒れて潰れたという風に、半分以上掘り出されています。そこらには、蹄のついた足跡のある岩が十ばかり、四角に切り取られて番号がつけてありました。

「君たちは参観かね。くるみが沢山あつたろう。ざつと百二十万年前のくるみだよ。ごく新しい方さ。ここは第三紀のころには海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そつくり塩水が寄せたり引いたりしていたのだ。このけものかね、これはボスといってね、おいおい、つるはしはよしたまえ。ていねいに鑿でやってくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するのに要るんだ。ここは厚い立派な地層で、ぼくらから見ると、百二十万年前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみても、やっぱりこんな地層に見えるかどうかということなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい。そこもスコップではいけない。すぐ下に肋骨が埋もれてる筈じゃないか。」

学者はあわてて走つて行きました。カムパネルラが地図と腕時計とを見くらべて云いました。

「もう時間だよ。行こう。」

ジョバンニは、ていねいに学者におじぎしました。

「では、わたくしどもは失礼いたします。」

「そうですか。いや、さよなら。」

学者は、また忙がしそうに歩きまわつて監督をはじめました。二人は、白い岩の上を汽車におくれないように一所けん命走りました。息も切れず膝もあつくなくなりませんでした。

こんなにしかけるなら、もう世界中だつてかけれると、ジョバンニは思いました。間もなく二人は、もとの席に座つて、いま行つてきた方を、窓から見っていました。

八、鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

「ええ、いいです。」

ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。

ぼろぼろの茶色い外套を着て、白い巾で包んだ荷物を二つ肩に掛けて、背中のかんだ赤髯の人でした。その人はかすかに笑いながら荷物をゆつくり網棚にのせました。

ジョバンニは、かなしいような気持ちで正面の時計を見ていました。すると、ずうつと前の方で、硝子の笛が鳴りました。

汽車はだんだん早くなつて、すすきと川とが、かわるがわる窓の外に光りました。

赤ひげの人がおぼろしなながら訊きました。

「あなた方は、どちらへいらつしやるんですか。」

「どこまでも行くんです。」

「それはいいね。この汽車は、どこまでも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」

カムパネルラが、喧嘩のようにたずねましたので、ジョバンニは、思わずわらいました。

すると向こうの席で、尖った帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人も、こつちを見て笑いましたので、カムパネルラもつい笑ってしまいました。

ところが赤ひげの人は別に怒ったようすもありません。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです。」

「どうやって捕るんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」

ジョバンニは、どつちでもいいと思いました。

「そいつはな、雑作ない。さぎというものは、天の川の砂が凝って、ぼおつとできるもんですからね。そして、川へ帰りますからね。川原で待っていて、下りてくる脚を、地べたへつくつかつかないうちに、ぴたつと押えちまうんです。するともうかたまつて、安心して死んじまいます。あとは押し葉にするだけです。」

「標本ですか。」

「標本じゃありません。みんな食べるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」

「おかしいも何ありません。そら。」

男は立ちあがって網棚から包みをおろすと、手ばやくくるくと解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです。」

「ほんとうに鷺だねえ。」

北の十字架のように真っ白い鷺が十ばかり、平べったくくなって、黒い脚をちぢめて、浮彫のようにならんでいます。頭の上の槍のような白い毛もちゃんといっています。

「眼をつぶってるね。」

カムパネルラは、三日月がたの白い眼にそつと指でさわりました。

「ねえ、そうでしょう。」

鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくくりました。ジョバンニは、いったい誰がここらで、鷺なんぞ喰べるだろうと思いました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もつと売れます。柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら。」

鳥捕りは、また別の包みを解きました。すると、黄いろと青じろとまだらに光る雁が、くちばしを揃えて扁べったくなくなって、ならんでいました。

鳥捕りは、黄色い雁の足を、軽くひっぱりました。すると、チョコレートでもできているように、すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんください。」

鳥捕りは、それを二つにちぎってわたしました。ジョバンニは、ちよつと喰べてみました。

(なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりもおいしいけれど、こんな雁が飛んでいる

もんか。この男は、そこらの菓子屋だ。ああ、ぼくは、この人をばかにしながら、この人のお菓子を食べている。」

「鷲は、なぜ手数なんですか。」

「それはね、鷲を喰べるには、天の川の水あかりに十日もつるして置くか、砂に三四日うずめなければいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになる。」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」

「そうそう、ここで降りなけあ。」

鳥捕りはあわてて立って、荷物を取ったと思うと、もう見えなくなっていました。

「どこへ行ったんだらう。」

二人は窓の外をのぞきました。鳥捕りは河原ハハコグサの中に立って、まじめな顔で両手をひろげ、じつとそらを見えています。

「あすこへ行ってる。きつとまた鳥をつかまえるとこだ。早く鳥がおけるといいな。」

と云った途端、桔梗いろの空から、まるで雪の降るように、鷲がぎやあぎやあ叫びながら、いっぱい舞いおりて来ました。

鳥捕りはほくほくして、鷲のちぢめた黒い脚を両手で片っ端から押えて、布の袋に入れるのでした。鷲は、袋の中で蜚のように青くぺかぺか光ったり消えたりしましたが、しまいには、みんな白くなって、眼をつぶるのでした。

鳥捕りは二十疋ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって死ぬようなかたちをしました。

と思つたら、もう鳥捕りの形はなくなつて、ジョバンニのとなりで、聞き覚えのある声がありました。「ああせいせいの。からだに恰度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな。」

鳥捕りは、とつて来た鷲を、もうきちんとそろえて、一つずつ重ね直しています。

「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか。」

「どうしてって、来ようとしたから来たんです。あなた方はどちらからおいでですか。」

ジョバンニは、すぐに返事をしようとしたが、どこから来たのか、考えつきませんでした。カムパネルラも、顔を真っ赤にして何か思い出そうとしました。

「ああ、遠くからですね。」

鳥捕りは、わかつたというように雑作なくうなずきました。

九、ジョバンニの切符

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

天の川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立っています。その一つの平屋根の上に、青宝玉と黄玉と二つの大きなすきとおった球が、輪になつてくるくとまわっていました。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」

「切符を拝見いたします。」

赤い帽子をかぶったせいの高い車掌でした。

鳥捕りはかくしから小さな紙きれを出しました。

車掌は、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）というように、ジョバンニたちの方へ手を出しました。

「さあ……」

ジョバンニが困つてもじもじしていましたら、カムパネルラはすぐに、小さな鼠いろの切符を出し

ました。

ジョバンニは、もしか上着のポケットにでも入っていたかと、手を入れて見ましたら、畳んだ大きな紙きれにあたりました。ハガキぐらいの四つ折りの緑いろの紙でした。

何でも構わないと思つて渡すと、車掌は丁寧に開きました。ジョバンニは、あれはたしかに証明書か何かだったと考えて胸が熱くなりました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」

「何だかわかりません。」

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、第三時ころになります。」

車掌はジョバンニに紙を渡して向うへ行きました。

カムパネルラは、待ち兼ねたようにその紙切れをのぞきこみました。

いちめんの黒い唐草模様の中に、おかしな字を十ばかり印刷したもので、見てみるとその中へ吸い込まれてしまいそうでした。

すると、鳥捕りが横からちらつと見て云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。あなた方、大したもんですね。」

「何だかわかりません。」

ジョバンニはきまりが悪いので、カムパネルラと二人、また窓の外をながめました。鳥捕りが大したもんだというように時どきこつちを見ているのがわかりました。

「もうじき鷲の停車場だよ。」

カムパネルラが、向う岸の三つならんだ青白い三角標と地図とを見較べて云いました。

ジョバンニは鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。

（この人のほんとうの幸になるなら、自分の持つてる食べ物でもなんでもやっつてしまいたい。天の川の河原に百年つづけて立つて、鳥をとつてやつてもいい。）

あなたのほしいものは一体何ですか、と訊こうとして、あんまり出し抜けだから、どうしようかと考えて振り返つて見ましたら、鳥捕りはもう居ませんでした。

また鷲を捕ろうとしているのかと思つて、窓の外を見ましたが、外はいちめんの砂子と白いすすきの波ばかりで、鳥捕りの広い背中も尖つた帽子も見えませんでした。

カムパネルラがぼんやり云いました。

「あの人どこへ行つたろう。」

「どこへ行つたろう。一体どこでまた会うのだろう。僕はどうして、もう少し物を言わなかつたろう。」

「僕もそう思っている。」

「僕は、あの人が邪魔な気がしたんだ。」

ジョバンニは、こんな変てこな気もちは初めてだし、今まで云つたこともないと思ひました。

十 青年と二人の子ども

カムパネルラ「何だか苹果の匂がする。僕いま苹果のこと考えたためだろうか。」

カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうだ。それから、野茨の匂もする。」

ジョバンニもそこらを見ましたが、いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないと思ひました。

すると、そこに、八つばかりの黒い髪の男の子が、赤い上着のぼたんもかけず、びっくりしたような顔をして、はだしでがたがたふるえて立っていました。

隣りには黒い洋服を着た背の高い青年が、男の子の手を引いて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ。」

十二ばかりの茶いろい眼の女の子が、黒い外套を着て、青年の腕にすがっていました。

「ああ、ここはランカシャーだ。いや、ぼくたちは空へ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。神さまに召されているのです。」

黒服の青年はよろこびにかがやいて女の子に云いました。けれども、大へん疲れているらしく、無理に笑いながら、男の子をジョバンニのとなりに座らせました。

「ぼく、大姉さんのとこへ行くんだよう。」

青年は何とも云えず悲しそうな顔で、その子のぬれてちぢれた頭を見ました。

それから、女の子には、カムパネルラのとりの席を指さしました。

女の子はすなおに座りましたが、両手を顔にあててしくしく泣きだしました。

「お父さんや大姉さんは、まだいろいろお仕事があるのです。けれども、もうすぐあとからいらっしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待っていらっしやるでしょう。早く行ってお目にかかりましょうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかったなあ。」

「ええ、けれど、ごらんさい、あの立派な川。ね、あすこは、夏中、「ツインクル、ツインクル、リトル、スター」をうたつてやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」

女の子もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年はまた云いました。

「わたしたちはもう悲しいことはないのです。こないいとこを旅して、じき神さまのとこへ行きます。そこは明るくて匂いがよくて、立派な人たちでいっぱいです。わたしたちの代りにボートへ乗れ

た人たちは、みんな助けられて、お父さんやお母さんや自分のおうちへ行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたつて行きましよう。」

青年は男の子のぬれた黒い髪をなでながら、顔いろがだんだんかがやいて来ました。

さつき笑った燈台守が青年にたずねました。

「あなた方はどちらからいらっしやったのですか。」

「ええ、船が氷山にぶつつかって沈みましてね。わたしたちは、こちらのお父さんが一足さきに本国へお帰りになったので、あとから発つたのです。ところが、ちょうど十二日目、船が氷山にぶつつかって一ぺんに傾き、沈みかけました。月はありましたが、霧が深かったのです。救命ボートは、とてもみんなは乗り切らないのです。わたしは必死になって、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐ道を開いて、子供たちのために祈って呉れました。けれども、ボートのところまでには小さな子どもや親たちがいて、とても押しつける勇気がなかったのです。私は覚悟して、二人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうと、船の沈むのを待っていました。誰が投げたか、ライフブイが飛んで来ましたけれども、滑って向うへ行ってしまうました。私は一生けん命で甲板の格子をはずして、三人しつかりとりつきました。どこからともなく賛美歌の声がありました。そのとき、俄かに大きな音がして私たちは水に落ち、渦に入ったと思ひながらしつかりこの人たちをだいて、それからぼうつと思つたら、ここへ来ていたのです。」

そこから小さな祈りの声が聞こえ、ジョバンニもカムパネルラも、いろいろのことを思い出して眼が熱くなりました。

（ああ、氷山の流れる北の海で、だれかが小さな船に乗って烈しい寒さと一生けんめいたかっている。ぼくはその人が気の毒ですまない気がする。その人のさいわいのために、どうしたらいいのだろう。）

ジョバンニは首を垂れて、ふさぎ込んでしまいました。燈台守がなぐさめました。「なにがしあわせかわからないです。どんなつらいことでも、それがただしいみちを進む中でできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づくと一あしずつです。」
「そうです。いろいろな悲しみも、いちばんのさいわいに至るためのおぼしめしです。」
二人の子どもはめいめいぐったり席によりかかって睡っていました。

十一 鳥たちとうもろこし

ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向う側の窓を見ると、野原はまるで幻燈のようでした。百も千もの大小さまざまな三角標、大きなものの上には赤い点点をうった測量旗も見えます。野原のはては、ぼおっと青白い霧のようです。ときどきさまざまな形の狼煙が、桔梗いろの空にうちあげられました。すきとおった風は、ばらの匂でいっぱいでした。

川は二つにわかれました。真つ暗な島のまん中に高く組まれたやぐらの上に、寛い服を着て赤い帽子をかぶった男が立っていました。

両手に赤と青の旗をもつて空を見上げて信号しているのです。ジョバンニが見ている間、しきりに赤い旗をふっていました。俄かに赤旗をうしろにかくすようにし、それから青い旗を高くあげて、オーケストラの指揮者のように烈しく振りました。

すると、ざあっと雨のような音がして、何か真つ黒なものが、いくかたまりも鉄砲丸のように川に向うへ飛んで行きました。

美しい桔梗色の空を、何万という小さな鳥どもがせわしなく通って行くのでした。

二人の顔を出しているまん中の窓から女の子が顔を出して、頬をかがやかせながら空を仰ぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、空のきれいなこと。」

女の子はジョバンニに話しかけましたけれども、ジョバンニは、生意気だ、いやだと思つて、空を見あげていました。

女の子は小さく息をして席へ戻りました。カムパネルラは気の毒そうに窓から顔を引つ込めて地図を見ました。

「あの人、鳥に教えてるんでしょか。」

「わたり鳥へ信号してるんです。どこからか、のろしがあがるためでしょう。」

カムパネルラがおぼつかないように答えました。ジョバンニはもう頭を引つ込めたかったですけれども、明るいとこへ顔を出すのがつらいので、だまつて口笛を吹いていました。

（どうして僕はこんなにかなしのさだろう。もつところもちを大きく持たなければいけない。向うの岸の静かな青い火を見て、心持ちをしずめるんだ。）

ジョバンニは熱つて痛いあたまを両手で押えました。

（どこまでも僕といっしょに行くひとは、いないのだろうか。カムパネルラは、あんなに女の子とおもしろそうに談している。僕はつらい。）

ジョバンニの眼はまた涙でいっぱいになり、天の川もまるで遠くへ行つたようにぼんやり白く見えるだけでした。

汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通りました。向う岸の黒い崖が、川を下るにしたがつてだんだん高くなって行くのでした。

ちらつと大きなとうもろこしの木が見えました。ぐるぐるに縮れた葉の下には美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて、真珠のような実もちらつと見えました。

カムパネルラが「あれ、とうもろこしだねえ」と云いましたけれども、ジョバンニは気持がなおり

ません。野原を見たままぶつきり棒に「そうだろう」と答えました。

汽車はだんだんしずかになって、小さな停車場にとまりました。正面の青じろい時計はかつきり第二時を示し、その振子はカチツカチツと正しく時を刻んでいます。

そして、遠くの野原の果てから、かすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。

「新世界交響楽だわ。」

汽車の中では黒服の青年も誰もみんな、やさしい夢を見ているのでした。

（どうして僕は愉快になれないのだろう。どうしてこんなにさびしいのだろう。カムパネルラはひどい。女の子とばかり談しているんだもの。）

ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして窓のそとを見つめていました。

すきとおった硝子のような笛が鳴って、汽車はしずかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。

突然、黒い巨きな野原がいつぱいにひらけました。新世界交響楽はいよいよはつきり地平線のはてから湧きあがります。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」

まっ黒な野原のなかを、白い鳥の羽根を頭につけ、胸と腕を石で飾ったひとりのインデアンが、一目散に汽車を追って来るのでした。

黒服の青年も眼をさました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走って来るわ、走って来るわ。追いかけているんですよ。」

「いいえ、汽車を追ってるんじゃないですよ。狼をするか踊るかしてるんですよ。」

こつち側の窓を見ますと、汽車は高い崖の上を走っていて、谷底には幅ひろい川が、明るく流れていたのです。

どんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかかるときには川が明るく下にのぞけたのです。

ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなって来ました。汽車が小さな小屋の前を通ってその前にしよんぼりひとりの子供が立ってこつちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛にすっかりしがみついています。

ジョバンニは思わずカムパネルラとわらいました。天の川は汽車のすぐ横手を激しく流れてちらちら光っていました。うすあかい河原なでしこの花があちこちに咲いていました。

十二 サソリの火と十字架

川の向う岸が俄かに赤くなりました。楊の木がまっ黒にすかし出され、天の川の波もちらちら針のように赤く光りました。野原に大きなまっ赤な火が燃やされ、黒いけむりは桔梗色の天をも焦がしそうです。

「あれは何の火だろう。」

「蝸の火だな。」

カムパネルラが、また地図と首つ引きで答えました。

「あら、蝸の火のことならあたし知ってるわ。」

「なんだい、蝸の火って。」

「蝸がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるって、お父さんから聞いたわ。」

「蝸って、虫だろう。」

「ええ、虫よ。だけど、いい虫だわ。」

「いい虫じゃないよ。尾にカギがあつて、それで螯されると死ぬって先生が云った。」

「そうよ。だけど、いい虫だわ、お父さん斯う云ったのよ。むかし、バルドラの野原に一ぴきの蝸がいて、小さな虫を殺して食べて生きていたんですって。ある日、イタチに見附かつて食べられそうになつたんですって。一生けん命逃げたけど、とうとうイタチに押えられそうになつたの。そのとき、蝸は井戸に落ちてしまつたわ。どうしてもあがれなくて、溺れはじめたのよ。そのとき、こう云つてお祈りしたの、「ああ、わたしは今までいくつのものの命をとつたかわからない。そのわたしがこんどは、イタチにとられそうになつて一生けん命にげた。それでも、とうとうこんなになつてしまつた。どうしてわたしのからだを、だまつてイタチに呉れてやらなかつたらう。そしたら、いたちも一日生きのびたらうに。どうか神さま、この次はむなしく命を捨てずに、みんなの幸いのために私の中からだをおつかい下さい」って。そしたら、蝸は自分のからだがまつ赤な美しい火になつて、夜のやみを照らしているのを見たつて。「いまでも燃えてる」ってお父さん仰つたわ。あの火、それだわ。」

「そうだ。見たまえ。三角標がちょうどさそりの形にならんでいる。」

向こうの三つの三角標はさそりの腕のように、こっちの五つの三角標は尾やかぎのようにならんでいます。さそりの火は音もなく明るく燃えています。

その火がだんだんうしろになるにつれて、にぎやかな楽の音や草花の匂いや口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。近くに町があつてお祭でもあるようでした。

「ケンタウル露をふらせ。」

いままで睡っていたジョバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながらいきなり叫びました。

そこには、クリスマスストリイのようなもみの木が立つて、たくさん豆電燈が螢の集つたようについでいました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」

「もうじきサウザンクロスです。おりの支度をして下さい。」

「僕、も少し汽車へ乗ってるんだよ。」

女の子は立つて支度をはじめましたけれども、ジョバンニたちとわかれたくないようでした。

「ここで降りないといけないのです。」

青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

「いやだ。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

「僕たちと一緒に乗って行こう。僕たち、どこまでだつて行ける切符持つてるんだ。」

女の子がさびしそうに云いました。

「だけど、あたしたちここで降りないといけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから。」

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもっといいところをこさえないといけないって僕の先生が云つたよ。」

「だつてお母さんも行ってらっしゃるし、それに神さまが仰っしゃるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだ。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまうその神さまですか。」

「ぼく、ほんとうはよく知りません。けれども、たつた一人の神さまです。」

「もちろん、神さまは、たつた一人です。」

「ああ、そんなでなしに、たつたひとりのほんとうの神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまに、そのほんとうの神さまの前でわたく

したちとお会いになることを祈ります。」

青年はつつましく両手を組みました。女の子もその通りにしました。みんな別れが惜しそうで、顔いろも青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣きそうでした。

「さあもう支度はいいですか。じきサウザンクロスですから。」

そのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙や、あらゆる光でちりばめられた十字架がまるで一本の木という風に、川の中から立ってかがやき、その上には青じろい雲がまるい環になって、後光のようにかかっているのです。

汽車の中がざわざわしました。みんなまっすぐに立ってお祈りをはじめました。あつちにもこっちにも、よろこびの声や深いためいきの音がきこえました。

「ハルレヤ、ハルレヤ」と明るく楽しく、みんなの声は響き、冷たい空の遠くから、すきとおったさわやかなラッパの音が聞こえました。

そして、たくさんのシグナルや電燈の灯のなかを、汽車はだんだんゆるやかになり、とうとう十字架の真向かいに行つて止まりました。

「さあ、下りるんですよ。」

青年は男の子の手を引いて出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」

女の子がふりかえつて二人に云いました。

「さよなら。」

ジョバンニは泣き出したいのをこらえて、怒ったようにぶつきり棒に云いました。女の子はつらそうに眼を大きくして、も一度こつちをふりかえつて、それからだまって出て行つてしまいました。

汽車の中はもう半分以上も空いてしまい、俄かにならんとして、さびしくなり、風がいつぱいに吹

き込みました。

みんなはつつましく列を組んで、十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。

ふたりは、白い着物を着た神々しいひとりの人が、手をのばしてこつちへ来るのを見ました。

けれどもそのときはもう、硝子の呼子が鳴らされ、汽車はうごき出し、と思ううちに銀いろの霧が川下から流れて来て、何も見えなくなりました。

そのとき、すうつと霧がはれかかりました。さっきの十字架は、すっかり小さくなってしまい、そのまま胸にも吊されそうになりました。

ジョバンニは、ああつと深く息をしました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでも一緒に行こう。僕は、あのさそりのように、みんなの幸のためならば、僕の中からだなんか百へん灼いてもかまわない。」

「うん。僕だつてそうだ。」

カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体、何だろう。」

「僕わからない。」

「僕たちしつかりやろうねえ。」

「あ、あそこ石炭袋だよ。そらの孔だよ。」

ジョバンニはぎくつとしました。天の川の一とこに大きなまつくらな孔がどおんとあいているのです。その底がどれほど深いか、その奥に何があるか、なんにも見えずただ眼がしんしんと痛むのです。

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。みんなのさいわいをさがしに行く。どこまでも僕たち一緒に行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集ってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつ、あすこにいるの、ぼくのお母さんだよ。」

カムパネルラは俄かに、遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそっちを見ましたけれども、そこはぼんやり白くけむっているばかりでした。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」

ジョバンニがふりかえって見ましたら、カムパネルラのすがたは見えず、黒いビロードばかり光っていました。

ジョバンニは鉄砲丸のように立ちあがりました。そして窓の外へからだを乗り出して力いっぱいげしく胸をうって叫び、それから咽喉いっぱい泣きだしました。そこらが一ぺんにまっくらになったように思いました。

十三 水に落ちた子ども

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱り、頬にはつめたい涙がながれていました。

ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はさっきのとおり、下でたくさん灯を綴ってはいましたがその光はなんだかさつきより熱したようでした。

そしてたつたいま夢で歩いた天の川も、さっきのとおり、白くぼんやりかかき、その右には蠍座の赤い星がうつくしくきらめきました。

ジョバンニは一さんに走って丘を下りました。そして、町の通りのはずれに出ました。川にかかった大きな橋のやぐらが、夜のそらにぼんやり立っていました。

橋の上にも、いろいろなあかりがいっぱいでした。女たちが七、八人、町かどに集って、橋の方を見ながら何かひそひそ談しています。

ジョバンニはさあつと胸が冷たくなったように思いました。

「何かあったんですか。」

「子どもが水へ落ちたんですよ。」

ジョバンニは夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい、河が見えません。白い服を着た巡査も出ていました。

ジョバンニは橋の袂から飛ぶように河原へおりました。

水際に沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。向う岸の暗い土手にも火が七つ八つ動いていました。もう烏瓜のあかりもない川が、しずかに音をたてて灰いろに流れています。

下流の州のところに、人の集りがくつきりまっ黒に見えました。ジョバンニはどんどんそっちへ走りしました。

すると、さつきカムパネルラといっしょだったマルソに会いました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附からないんだ。」

ジョバンニはみんなの居る方へ行きました。町の人たちに囲まれて、青じろい尖ったあごをしたカムパネラのお父さんが、黒い服を着て立って、右手に持った時計をじつと見つめていたのです。みんなもじつと河を見ていました。誰も一言も物を云いません。

ジョバンニは足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして、川の黒い水はちらちら小さな波をたてて流れていました。

下流には、川はぼーぱい銀河が巨しく写って、まるで水のない空のように見えました。

ジョバンニは、（カムパネラはもうあの銀河のはずれにしかない）という気がしました。

けれどもみんなは、カムパネラが波の間から、「ぼくずいぶん泳いだぞ」と云って出てくるか、どこかの洲に着いて誰かの来るのを待っているような気がするらしいのです。

けれども、カムパネラのお父さんがきつぱり云いました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから。」

ジョバンニはかけよって、ぼくはカムパネラの行った方を知っています。ぼくはいつしよに歩いていたので、と云おうとしましたが、のどがつまって何とも云えませんでした。

カムパネラのお父さんはまた、銀河のいっぱいにつつた川下へ眼を送りました。

ジョバンニはなにも言えず、胸がいっぱいになりました。

（カムパネラ、僕はまた一人きりだ。でも、みんなの幸いのために僕は生きたい。それがいったい何なのか、まだわからない。けれども、みんなのために、みんなの幸いをさがしに行くよ。）

それから、ジョバンニは土手を駆け上がって、お母さんたちの住んでいる街の方へ向かって一目散に走り出しました。

（終）

（この作品は宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を渡辺知明が添削して仕上げたものである）